



飯田さん(左から2人目)はスポンサーのCM動画の撮影など公演の準備に奔走した(11月下旬、東京・新宿)

「壁の連続だった」。早稲田大学のチアダンスのサークル「MYNX」代表で3年生の飯田芽生愛は新型コロナウイルス禍でサークルが何度も存続の危機に陥った日々を振り返る。例年は新入生20人ほどが会員になるが、昨年度は13人と過去最低に落ち込んだ。安易に練習を休むメンバーも出始め、組織の士気は低下した。「成果を披露する機会はないのかも」。感染が拡大するたびに悩んだ。

チアダンスはメンバーの動きの一致が不可欠なのにチーム練習は度々禁止された。練習が解禁されてもコロナ禍のおおりに安く利用できる施設は限られ、資金繰りに困ることもあった。諦めずに活動を続けてサークルの存続を模索し、オンラインで新歓活動をするなど地道な努力が実を結び、今年度に入会した新入生は26人と過去最多になった。「人々の関係が希薄になりがちでコロナ下だからこそ、サークルの仲間とのつながりを大切にしてきた」。飯田らサークルの最上級生が引退する最後の公演は12月15日、オンラインではなく、有観客で開催した。

全国大学生協連の昨秋の調査では、サークルに所属する1年生は2019年秋には82・8%だったが、コロナ下の20年秋には48・7%まで落ち込んだ。同年4月にサークル加入した1年生はわずか6・6%だった。

サークルへの潜在需要は消えたわけではない。神戸大学での今年の「秋新歓」には予想を上回る200人弱が参加した。運営リーダーの嶋来雪は「コロナ禍で入会を逃した2年生の参加も目立った」という。

それでも友達づくりに苦労する大学生は多い。全国大学生協連の先の調査では友達ができず悩む1年生が前年比20・3%も増え、34・5%に達した。

東北大学2年の狐野彩人も孤独に苦しんだ一人だ。地元・北海道の高校では人と話すのが大好きで、約300人の同級生のほとんどと友達だったが、オンラインが常態化した大学生活では高校時代とのギャップから「自分が必要とされていない」と狭い自室で一人悩んだ。

狐野は昨秋、孤立した学生を支援する団体「はぐね」を設立した。同じ境遇の学生らと悩みを分かち合うなかで、孤独感は少しずつ消えていった。狐野は今、こう思える。「多くの人と出会うよりも、今の友達を大切にしたい」

飯田さん(左から2人目)はスポンサーのCM動画の撮影など公演の準備に奔走した(11月下旬、東京・新宿)

堀部遥、荒牧寛人、荒木玲、黒沢亜美が担当しました。

(敬称略)